

解答

⑥

傍線部において、置き字の「於」が用いられていることに注目しよう。「於」は、「平」「干」とともに、**客語(体言)の前**に置いて、**上にある述語(用言)に返ることを示す置き字**だ。傍線部でも、「敬」に返る形で返り点がなければならない。よって、そのようになっていない①・③・④は誤りである。

次に、置き字の「於」「乎」「干」は述語と客語の関係を表わすが、その関係は、**I受身・II比較・III動作の対象**の3つだ。②は「よりも」とII比較として訓んでいるが、「事上」と比較される対象が本文に見当たらないので、誤りと判断できる。

残るは⑤・⑥だ。⑤は「くんや」と反語で訓んでいるが、それでは「上(君主)に対して敬意を払わない」という意味になってしまい、明らかに文意に合わない。よって、消去法により正解は⑥と判定できる。

解釈しよう。「事」は動詞で「つかふ」と訓み、「仕える」の意。「上」は「君主」のこと。傍線部は、「事上(上に事ふ)」が客語となって、述語の「敬(敬あり)」に返る、という構造になっている。よって、「君主に仕えるのに敬意がある」と解釈できる。なお、「敬(敬あり)」は直前にある「智(智あり)」と並列されている。

**返り点の付け方を問う問題では、置き字の「於」「乎」「干」で返るといことがポイントになる**ことがあるので、頭に入れておこう。

選択肢チエック

問

傍線部A「敬於事上」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑥のうちから、一つ選べ。

- ① 敬<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>事<sub>上</sub>
- ② 敬<sub>二</sub>於<sub>一</sub>事<sub>上</sub>
- ③ 敬<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>事<sub>上</sub>
- ④ 敬<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>事<sub>上</sub>
- ⑤ 敬<sub>二</sub>於<sub>一</sub>事<sub>上</sub>
- ⑥ 敬<sub>二</sub>於<sub>一</sub>事<sub>上</sub>

敬して上に事あらしむ  
 上に事<sup>つか</sup>ふるよりも敬たり  
 敬して上に事へんや  
 敬して事に於いて<sup>たてまつ</sup>上る  
 事の上に敬<sup>つ</sup>しまんや  
 上に事ふるに敬あり

比較する対象がない

置き字の「於」があるので「敬」に返る

反語ではない

### 書き下し文

夫人曰はく、「妾聞く、礼に公門に下り、路馬に式するは、敬を広むる所以なりと。夫れ忠臣と孝子とは、昭昭の為に節を信べず、冥冥の為に行を墮らさず。蘧伯玉は衛の賢大夫なり。仁にして智有り、上に事ふるに敬あり。此れ其人必ず闇昧を以て礼を廃せず、是を以て之を知る」と。公之を視しむるに、果たして伯玉なり。

### 現代語訳

(衛霊公の)夫人が言うには、「私はこのように聞いております。『礼記』に大夫の行う礼として、君主の住む宮殿の門前では車を下り、君主の馬に対しては敬礼するとありますが、これは君主に対する敬意を表わすためのものです。そもそも忠臣と孝子とは、人が見ているからといってわざと礼儀を誇張することはないですし、見ていないからといって礼行を怠るといふこともありません。蘧伯玉は衛の国に知られる賢明な大夫です。仁徳があつて知恵もあり、君主である陛下にお仕えるのにも敬意があります。闇闇であつたとしても礼節を欠く人ではけつしてございません。こういうわけでこのこと(門を通り過ぎた人物が蘧伯玉であること)が分かったのでございます」と。衛霊公が侍者に見に行かせたところ、まさしく蘧伯玉であつた。

### 重要語句

- 所以 「ゆゑん」と訓む。「理由・方法」の意。
- 与 本文では、格助詞「と」の働き(並列)をする返読文字として用いられている。
- 是以 「ここをもつて」と訓む。「こういうわけで・だから」の意。